

はじめに

クロスメディアHR総合研究所は、ビジネス書出版事業を手がけるクロスメディアグループの「経営と人事」に特化した研究機関として発足しました。2018年に誕生した『こんな会社で働きたい』シリーズは、地方の輝く企業にスポットを当て、これまで「千葉編」「埼玉編」「神奈川編」「茨城編」「大阪編」「広島編」「兵庫編」「奈良編」「石川編」と出版してまいりました。その後、地域以外にもテーマの幅を広げ、2020年には「健康経営企業編」を出版。そして今回は「SDGs編」として、これからの時代のキーワードである「持続可能性」を追求する企業をご紹介します。

就職活動中、あるいはこれから就職活動の準備を始める学生の皆さんは、社会に出ていくことに多くの不安を抱えていることでしょう。

仕事をきちんと覚えられるだろうか。

規則正しい生活を送れるだろうか。

自分がやりたいことと仕事はマッチしているだろうか。

新型コロナウイルスによって、「これからどうなるのだろうか」と社会に対する漠然とした不安もあるかもしれません。学生生活において、「オンライン授業になった」「アルバイト収入が激減した」「サークル活動ができなかった」など、何かしらの影響を受けた人も多いと思います。皆さんも肌で感じているように、いま世の中は大きく変わっており、これまで当たり前だったことが通用しない未来が待っています。

皆さんは将来の見通しの立たない時代に、社会人としてのスタートを切ることになります。その中で知っておくべきことは、社会における普遍的な価値観です。後ほど詳しく述べますが、SDGsはまさにその価値観が凝縮された国際的な目標でもあるので、知っておいて損はありません。

それと同時に、皆さんは社会的課題への関心が高い世代といわれ、企業からも大きな期待を寄せられています。自分が社会に対して価値を生み出せる人材になるにはどうすればいいのか。すでに考えている人もいるかもしれません。

一方で、「まだそんなことまで考えていない」という人も当然いるでしょう。自分の好きなことに没頭する時間が長かった人は、社会に対する関心もまだ薄いかもしれません。「最近よく聞くSDGsってなんだろう」とこの本を手にとった人もいると思います。でも、心配は必要ありません。皆さんはSDGsに何かしらの興味や関心を抱いて、本書を手にとったはずです。その時点で、大きな一

歩を踏み出したといえるのです。

本書は、SDGsについて、学校で勉強したという人も、ほとんど知らないという人も、一から理解できるような構成を目指しています。SDGsの基本的な考えにも触れながら、SDGsに取り組む企業の実例もたくさん載せています。企業担当者の生の声がこれだけ多く集まっている本は、類を見ないと自負しています。

本書の事例を一つずつ見ていくことが、そのまま企業研究にもつながります。SDGsへの取り組みだけが会社のすべてではありませんが、その会社が持続可能性をどのように実現しようとしているか、そして根幹にどのような考えがあるのかを知ることができるでしょう。

SDGsの取り組みは、これから長く続くものです。国連が目標とする2030年に向けて、具体的な目標を持って行動する企業はますます増えるでしょう。

学生の皆さんはまだ、自分が社会に対してどう役立っていけばいいのかイメージを持ちにくいかもしれません。それでも各社の事例を見ていくことで、自分は社会にどのように貢献したいか、ほんやりとでもイメージできるはずです。

本書は、企業の皆さんにもお役立ただけの内容にしています。

『こんな会社で働きたい』シリーズは、主に学生の皆さんや転職を検討中の方に役立つ情報をお届け

しているものですが、企業の方からも「自社の参考になった」とご好評をいただくこともあります。今回も、企業の方にとって参考になる話を取り揃えています。SDGsの歴史はまだ数年しかないだけに、「どう自社で取り組めばいいかわからない」企業も多いと思いますが、本書の事例から、何かヒントが見つかるのではないかと思います。

SDGsが世界的潮流である今こそ、形だけではない、社員それぞれの意識変革まで起こすチャンスといえるでしょう。

コロナ以前から、先行きが不透明な時代といわれていましたが、今後いつ予測不能な出来事が起こるかわかりません。その中で個人、そして企業が変わらずに取り組めることの一つに、持続可能な社会の構築があるのではないのでしょうか。

私たち一人ひとりがその体現者となれば、利益を追求しながら個人の目標、会社の目標、そして社会全体の目標にも向かっていくことができます。本書がその一助になることを願っています。

SDGsとは何か？ 世界と日本の現状

ここからはSDGsについて簡単に解説していきます。

最近、SDGsという言葉を目にするようになった、という人は多いのではないのでしょうか。すでに知っている方もいるかもしれませんが、SDGsとは2000年9月にニューヨークで開催した国連ミレニアム・サミットでまとめられた、「ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals : MDGs)」の後発の国際目標になります。

SDGsは、日本語では「エスディーズ」と読みます。

これは、「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略で、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」という文書にその内容が記載されています。2030年までに持続可能な、よりよい社会を目指すこの目標は、全部で17あります。

SDGsを構成するのは、17のゴール(目標)と169のターゲットになります。SDGsでは広範なテーマを扱っていますが、17のゴールは大きく3つに分類して捉えることができます。

3 すべての人に
健康と福祉を



目標3[保健]

あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する

4 質の高い教育を
みんなに



目標4[教育]

すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



目標7[エネルギー]

すべての人々、安価かつ信頼できる持続可能な近代的なエネルギーへのアクセスを確保する

8 働きがいも
経済成長も



目標8

[経済成長と雇用]

包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用(ディーセント・ワーク)を促進する

11 住み続けられる
まちづくりを



目標11

[持続可能な都市]

包摂的で安全かつ強靭(レジリエント)で持続可能な都市及び人間居住を実現する

12 つくる責任
つかう責任



目標12

[持続可能な消費と生産]

持続可能な消費生産形態を確保する

15 陸の豊かさも
守ろう



目標15[陸上資源]

陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する

16 平和と公正を
すべての人に



目標16[平和]

持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する

持続可能な開発目標 (SDGs) の詳細



目標1[貧困]

あらゆる場所あらゆる形態の貧困を終わらせる



目標2[飢餓]

飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養の改善を実現し、持続可能な農業を促進する



目標5[ジェンダー]

ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児のエンパワーメントを行う



目標6[水・衛生]

すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する



目標9

[インフラ、産業化、イノベーション]

強靱(レジリエント)なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る



目標10[不平等]

国内及び各国家間の不平等を是正する



目標13[気候変動]

気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる



目標14[海洋資源]

持続可能な開発のために、海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する



目標17[実施手段]

持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

1つ目は「社会面」での目標で、貧困や飢餓の撲滅、質の高い教育の提供など、現在も未解決のままとなっている社会問題に対する目標です。2つ目は「経済面」での目標です。働き方の改善など個々に関わるようなことから、クリーンエネルギーの開発や天然資源の管理など地球規模のもので、さまざま次元で持続可能な経済成長を目指しています。3つ目は「環境面」での目標で、地球環境や気候変動などに対応するためにつくられたものです。

これらの目標の達成に向け、具体的行動を示したものが、169のターゲットです。例えば、「2030年までに、飢餓を撲滅し、すべての人々、特に貧困層及び幼児を含む脆弱な立場にある人々が一年中安全かつ栄養のある食料を十分得られるようにする」「各国の状況に応じて、一人当たり経済成長率を持続させる。特に後発開発途上国は少なくとも年率7%の成長率を保つ」など、これから私たち人類が取り組むべき行動目標が具体的に示されています。

いま世界の政治や経済活動は、「地球上の誰一人取り残さず、(leave no one behind)」という誓いのもと、このSDGsを軸に動き始めています。

ただしその途中経過は、決して楽観できるものではありません。

一昨年の9月に開催された「SDGサミット2019」で、グテーレス国連事務総長は「取り組みは進展したが、達成状況には偏りや遅れがあり、あるべき姿からはほど遠い」と述べ、取り組みのさらなる強化を訴えています。

各国のSDGsの達成状況を分析した「SDG Index and Dashboards Report」の2020年版によると、調査対象国166カ国のうち最もSDGsが進んでいる国はスウェーデンでした。デンマーク、フィンランドといった北欧の国が続き、上位はヨーロッパの国が占めています。

スウェーデンで有名な会社には、日本でもおなじみの家具量販店のイケアがあります。同社は家具の材料として大量の木材を使用していますが、そのすべてが森林を破壊しないように管理された上での供給が徹底されています。また、女性や移民などが働きやすい、多様性のある労働環境を実現させるなど、自然環境への配慮にとどまらず、人に対するSDGsの目標達成にも力を入れています。

上位国に共通しているのは、サステナビリティの考え方やジェンダー平等の意識が元から根付いているということです。SDGsが始まる前から、すでに社会で取り組みが進んでいたのです。

日本は先ほどのレポートでは、17位に登場します。前年の同調査からランクを2つ下げているとはいえ、世界全体で見れば上位、アジアではトップに位置しています。

日本が比較的上位にランクされているのは、教育や技術革新の面での評価が要因とされています。一方でジェンダー平等など、課題も山積しています。女性の国会議員比率の低さや、男女間の賃金格差など、海外と比べると非常に遅れている状況です。

それでも状況は少しずつ変わり始めています。コーポレートガバナンス（企業統治）のコンサルティ

ングを手がけるプロネッドの調査によると、東証一部上場企業で女性社外取締役を選任している企業が、2020年7月1日時点で927社（全体の43・5％）にのぼることがわかりました。これは前年よりも2割増えており、2011年と比べて約15倍になります。一方、生え抜きの社内女性取締役を選任している企業は207社（全体の9・7％）にとどまり、女性社員の経営層への育成が進んでいないという課題も浮かび上がっています。

国内のトップ企業では、SDGsへの取り組みが活発にみられます。

トヨタ自動車は電動車の普及を進める中で「CO₂ゼロという価値の提供」を目指すとし、新車平均走行時の二酸化炭素排出量を2050年までに2010年比90％削減するという長期目標を掲げています。このほか、自動運転や電動化などの技術を結集した次世代電気自動車「e-Palette（イー・パレット）」により、車椅子の方や高齢者でも移動しやすく、すべての人が自由に楽しく移動できる社会を目指しています。先進技術を活かした社会貢献といえるでしょう。

ユニクロなどを展開するファーストリテイリングも、これまでのサステナビリティへの取り組みがそのままSDGsの目標達成につながっています。全商品をリサイクル、リユースする取り組み『RE・UNIQLO』からは、「リサイクルダウンジャケット」が実際に発売されました。また難民の雇用を推進し、世界各地のユニクロ店舗で121名の難民が働いています（2020年4月末時点）。女性が活躍できる環境の整備、積極的な障がい者雇用、LGBTQ+の従業員が安心して働ける職場環境づ

くりなど、働く人々に対する取り組みが進んでいます。

トップ企業に限らず、近年はSDGsに取り組む企業・団体が急速に増えています。企業が利益を追求しながらSDGsの目標を達成することは容易ではありませんが、今はそれに取り組むことが世界の潮流でもあるのです。

2020年は、新型コロナウイルスのパンデミック（世界的な大流行）が人類に襲いかかった年でした。2021年現在も続くこの危機において、私たちはこれまで以上にグローバルな取り組みの必要性に迫られています。まずはこの状況を克服することが第一ですが、その後の世界をどのようにつくっていくべきかということも、あわせて考えていかななくてはなりません。アフターコロナの世界を見据えれば、SDGsに取り組むことの価値は、これからますます高まることでしょう。

なぜ企業がSDGsに取り組むべきなのかは、この後、SDGパートナーズCEOの田瀬和夫さんにさらに詳しく解説していただきます。ぜひそちらもお読みください。